

云りさゝのくまはたゞさゝの生たる所なり源氏曰くれたけのわざとなくかせにこぼれたるにはひといへり雖非薰香もの、いろにつれてにはひといへり竹にもいふべし。

〔藻鹽草八竹〕

河竹 くれ竹 谷のくれ竹 むら竹 さゝ竹 いさゝむら或はいさゝむら竹とも云歟 ふえ竹 より竹  
なよ竹 よながき わか竹 うへ竹 とよ竹 初學 やはしのしのからはし竹名 ゆさゝ  
ちいろの竹 もゝしきの玉のみぎりのみかい竹 われ竹 しのへ竹 の竹 まの竹 と  
よらの竹 あはら竹 から竹 さゝわくる袖 さゝ枕 さゝのはら又のいさゝの葉  
をさゝ をさゝ 原又をさゝの字ありても共 谷の竹ふ いはねのを竹 岩まの竹 たま竹 こ竹の  
はら あさ篠原 木にもあらず草にもあらぬ竹 いほつゝのたかむらはりもすひてつり  
むつかしきさゝのまくら 源氏 くれ竹のわざとなくかせにこぼれたるにはひといへり源氏也、  
香物の名につけて白といへ 千色草 異名也 小枝草 同 河玉草 同秋風はまとなる松にかかる  
竹にもいふべしてと云々 べき 夕玉草 これはたけ露をかく云也月にきくゆふ玉くさ 竹のふりね むらさきの竹 に  
藏玉 あき風に音はいつころね覺とはまし藏玉くさ 竹のかきう  
が竹 古今 竹のさ枝 さゝの葉のさやく たけのつほえ 葉かへせてとしる竹のかきう  
ち 縦むすび玄づがかきねのさゝくろめ 新 色かへぬ竹のはちいろあるかけ也 竹竹のは山  
こさゝ生にされたる竹 風竹也ゆがみ

〔日本釋名下竹〕 高きなり、けとかと通す、筍は旬日の間に長じて、高き事天にそびゆ、是草の中に  
と高き物也、

〔東雅十六竹〕 竹タケ 萬葉集抄に、タとは高き義なりといひけり、ケとは古語に木をケといふが如  
し、タケとは其生じて高きをいふなり、

〔倭訓栞前編十四〕たけ〇中

竹は一旬にして長高きの意也といへり、八月を伐の時とす、群芳譜